

幼児期における子育て環境が 学童期の子どもの心身の健康に及ぼす影響

アンメ トキエ シノハラ リョウジ スギサワ ユウカ マルヤマ アキコ
安梅 勅江*1 篠原 亮次*2 杉澤 悠圭*2 丸山 昭子*3
タナカ ヒロシ サカイ ハツエ ミヤザキ カツノブ コバヤシ アキオ
田中 裕*4 酒井 初恵*5 宮崎 勝宣*6 小林 昭雄*7
ミヤモト ユカリ アマヒサ シンゴ ウズハシ レイコ
宮本 由加里*7 天久 真吾*8 埋橋 玲子*9

目的 本研究は、幼児期の子育て環境が学童期の子どもの心身の健康にどのような影響を及ぼすのか実証的な根拠を得ることを目的とした。

方法 対象は、2005年に全国19カ所の保育園の卒園児調査に参加した134名であり、2002～2004年にその保育園に在籍した際、保育園児調査に参加した者131名を対象とした。学童期の心身の健康に、幼児期に把握した保育専門職の評価に基づく発達状況、気になる行動、保育時間、保護者の回答に基づく育児評価、子どもと家族の属性が及ぼす影響を多重ロジスティック回帰分析により明らかにした。

結果 幼児期に「家庭で歌を歌う機会等に乏しい」場合、機会のある場合に比較して、学童期に「いらいらする」12.20倍、「不機嫌で怒りっぽい」15.69倍多くなっていた。幼児期に「同世代の子どもを訪問する機会に乏しい」場合、機会がある場合に比較して、学童期に「疲れやすい」4.83倍、幼児期に「育児支援者がいない」場合、いる場合と比較して、学童期に「疲れやすい」が5.65倍、幼児期に「育児相談者がいない」場合、いる場合と比較して、学童期に「あまり頑張れない」が44.05倍、幼児期に「配偶者の子育て協力が得られない」場合に、得られる場合と比較して、学童期に「勉強が手につかない」が33.54倍、幼児期に「保護者の育児への自信がない」場合に、ある場合と比較して、学童期に「誰かに怒りをぶつきたい」が7.03倍多くなっていた。

考察 学童期の子どもの心身の健康と、幼児期の家庭における適切なかかわりや保護者へのサポートの関連性が示され、子どもと保護者を対象にした子育て支援の重要性が示唆された。

キーワード 学童、子育て環境、コホート研究、子育て支援

緒 言

幼児期の子育て環境が学童期の子どもの心身の健康にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることは、健やか親子21をはじめとする次世代育成支援において、きわめて重要な根拠となる。

われわれは、1997年より認可夜間保育園およ

び併設昼間保育所の追跡調査を実施している。子どもの発達評価、保護者への面接および質問紙調査、専門職や施設長の面接調査を毎年実施し、保育環境や家庭環境が子どもの発達、保育園への適応、健康状態に及ぼす影響を検討してきた。

幼児期の子どもの発達や健康状態には、保育時間の長さや時間帯などの保育の形態ではなく、

* 1 筑波大学人間総合科学研究科教授 * 2 国立看護大学校研究課程部修士課程 * 3 杏林大学保健学科助手
* 4 治田西カナリヤ第三保育園園長 * 5 小倉北ふれあい保育所主任保育士 * 6 路交館主任保育士
* 7 みのり園保育士 * 8 どころこ保育園事務 * 9 神戸女子大学助教授

子どもの発達にふさわしい家庭環境が準備されているか、保護者へのサポートがあるかどうか、保護者が育児に自信を持てる状況にあるかどうか強く影響していることが明らかにされている¹⁾²⁾。

欧米先進諸国では、幼児期の子育ち環境がその後の発達や健康にどのような影響を与えるのかを明らかにするコホート研究が実施されている。米国では、社会経済的地位の低い地域の子どもへの支援を意図した研究が多く、早期介入の効果が明らかにされている³⁾。また英国においては、大規模なコホート研究が複数企画され、幼児期の家庭におけるかかわりの乏しさは、適切な保育環境の整備により補完できるとした実証的な成果を得ている⁴⁾。

本研究は、学童期の子どもの心身の健康に幼児期の子育ち環境が及ぼす影響について実証的な根拠を得ることを目的とした。

対象と方法

(1) 調査方法

対象は、2005年に全国19カ所の保育園の卒園児調査に参加した134名であり、2002～2004年にその保育園に在籍した際、保育園児調査に参加した者131名を対象とした。

卒園児調査の内容は、心身の健康に関する項目として、身体面では「体がだるい」「疲れやすい」「体から力がわかない」「頭痛がする」、精神面では「あまり頑張れない」「気持ちが沈んでいる」「なんとなく心配だ」「さびしい」「いらいらする」「不機嫌で怒りっぽい」「誰かに怒りをぶつけたい」「勉強が手につかない」であった。

保育園児の調査では、保護者には「家庭環境」として育児環境に関する10項目、「育児サポート」として育児の相談者や支援者の有無等3項目、「保護者の特性」として育児意識、「子どもの特性」として性別、きょうだいの有無、「子どもの社会適応」として保育園への適応について質問紙により把握した。また保育専門職には「保育サービスの特性」として保育時間、

入園年齢、「子どもの発達」として園児用発達チェックリスト⁵⁾を用いた社会性発達(生活技術, 対人技術), 言語発達(コミュニケーション, 理解), 運動発達(粗大運動, 微細運動)の3領域6項目, 社会適応, 「健康状態」として食欲不振, 疲れやすい, 生活リズムの乱れ3項目を質問紙により把握した。

具体的には、育児環境と育児サポートに関する項目として、人的かかわりの領域では、1)子どもと一緒に遊ぶ機会、2)子どもに本を読み聞かせる機会、3)子どもと一緒に歌を歌う機会、4)配偶者(またはそれに代わる人)の育児協力の機会、5)家族で食事をする機会、制限や罰の回避の領域では、6)子どもの誤りへの対応、7)1週間のうち子どもをたたく頻度、社会的かかわりの領域では、8)子どもと一緒に買い物に行く機会、9)子どもを公園に連れて行く機会、10)子ども同伴の知人との交流の機会、育児サポートに関する項目として、11)育児支援者の有無、12)育児相談者の有無、13)配偶者と子どもの話をする機会、であった。

各項目の回答形式および分類方法は以下の通りである。

学童期の心身の健康は、「よくあてはまる」「すこしあてはまる」「あまりあてはまらない」「ぜんぜんあてはまらない」の4件法で尋ね、「よくあてはまる」を「あり群」、それ以外を「なし群」とし、欠損値は除外して分析した。

保育時間は、厚生労働省の延長保育促進事業の基準に基づき、11時間以上を「長時間保育群」、それ以外を「通常保育群」に分類した。

入園年齢は、1歳未満の入園を「1歳未満群」、1歳以上を「1歳以上群」とした。

育児環境は、人的かかわりの1)～5)と社会的かかわりの8)～10)の質問項目は、「めったにない」「月に1～2度ぐらい」「週に1～2度ぐらい」「週に3～4度ぐらい」「毎日」の5件法で尋ね、「めったにない」を「なし群」、それ以外を「あり群」とした。制限や罰の回避の6)子どもの誤りへの対応は、「子どもをたたく」「口でしかる」「何らかの方法で悪いことを分からせる」「別の方法を考える」「その他」の5件法で

尋ね、「子どもをたたく」を「不適切群」とし、それ以外を「適切群」とした。また、7)1週間のうち子どもをたたく頻度は、たたく回数を尋ね、「たたかない」を「なし群」とし、1回でもたたく場合は「あり群」とした。

育児サポートは、11)育児支援者、12)育児相談者は「いる」「いない」の2件法で尋ね、「いない」を「なし群」、「いる」を「あり群」とし、13)配偶者と子どもの話をする機会は、話をする回数を尋ね、「ほとんどとれない」を「なし群」、1カ月に1度以上取れる場合を「あり群」とした。

育児意識は、育児の自信が無くなると感じる事が「よくある」「ときどきある」「あまりない」「まったくない」の4件法で尋ね、「よくある」を「あり群」、それ以外を「なし群」とした。

きょうだいの有無は、「いない」を「なし群」、「いる」を「あり群」とした。

子どもの社会適応は、保育園に行くことを「たいへん楽しみにしている」「楽しみにしている」「どちらでもない」「あまりいきたがらない」「いやがっている」の5件法で尋ね、「いやがっている」を「不適応群」、それ以外を「適応群」とした。

子どもの社会性発達、言語発達、運動発達は、「園児用発達チェックリスト」⁵⁾のマニュアルに基づき、「ゆっくり群」と「通常群」に分類した。

健康状態は、身体症状を「いつもある」「ときどきある」「ない」の3件法で尋ね、「いつもある」を「あり群」、それ以外を「なし群」とした。

(2) 分析方法

学童期の心身の健康に対する幼児期の育児環境、保育環境、子どもの発達、社会適応、健康状態の影響を検討するため、学童期の心身の健康において各項目の有無別に、幼児期の保育の特性、育児環境、育児サポート、育児意識、子どもの発達状態、社会適応、健康状態についてカイ二乗検定を行った。

表1 学童期の心身の健康

	あり(%)	なし(%)	N
体がだるい	0.0	100.0	110
なんとなく心配だ	3.7	96.3	108
いらいらする	9.0	91.0	111
体から力がわかない	0.0	100.0	108
疲れやすい	11.6	88.4	112
さびしい	4.6	95.4	109
不機嫌で怒りっぽい	7.3	92.7	110
あまり頑張れない	2.8	97.2	108
頭痛がする	4.6	95.4	108
気持ちが沈んでいる	0.9	99.1	108
誰かに怒りをぶつけたい	7.3	92.7	110
勉強が手につかない	3.7	96.3	109

次いで、学童期の心身の健康を目的変数に、保育の特性(時間の長さ、入園年齢)、育児環境、育児サポート、育児意識、子どもの発達状態(社会性発達、言語発達、運動発達)、社会適応、健康状態を説明変数として、多重ロジスティック回帰分析を用い、学年を調整してオッズ比を算出した。

分析にはSAS統計パッケージVer.8を用いた。

結 果

(1) 学童期の心身の健康の実態

対象は、男児69名、女児62名、小学校1年生81名、2年生37名、3年生13名であった。学童期の心身の健康状態を表1に示す。「よくあてはまる」と回答した者は、各項目で0~11.6%の範囲であった。

(2) 学童期の心身の健康と幼児期の子育て環境との関連(表2)

予備的な分析として、学童期の心身の健康と、幼児期の関連要因との間でカイ二乗検定を実施した結果、有意な関連が得られた組み合わせを表2に示す。

まず、学童期の「疲れやすい」「頭痛がする」は学年と関連していた。

また学童期の「いらいらする」「不機嫌で怒りっぽい」「気持ちが沈んでいる」に幼児期の「家庭で歌を歌う機会等に乏しい」、学童期の

表2 学童期の心身の健康に関連する幼児期の要因

	カテゴリー	いらいら する (111)	疲れ やすい (112)	不機嫌で 怒りっぽい (110)	あまり 頑張れない (108)	頭痛が する(108)	気持ちが 沈んでいる (108)	誰かに怒り をぶつけた い(110)
学年	1年	10.0	9.7*	8.6	2.9	1.4*	0.0	7.0
	2年	6.5	6.5	6.3	3.3	13.3	3.3	9.7
	3年	10.0	44.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
歌と一緒に歌う機会	無し	50.0*	0.0	50.0*	25.0	25.0	25.0*	25.0
	有り	7.5	12.0	5.7	1.9	3.9	0.0	6.6
子どもと買い物に行く機会	無し	33.3	0.0	33.3	0.0	33.3	33.3*	33.3
	有り	8.3	11.9	6.5	2.9	3.8	0.0	6.5
同世代の子どもを訪問する機会	無し	12.5	18.2*	5.5	1.9	5.6	0.0	5.4
	有り	5.5	5.3	9.1	3.7	3.7	1.9	9.3
育児支援者	無し	15.4	28.0**	16.0	12.5**	4.0	0.0	15.4
	有り	7.1	6.9	4.7	0.0	4.8	1.2	4.8
育児相談者	無し	14.3	28.6	14.3	28.6*	0.0	0.0	14.3
	有り	8.7	10.5	6.8	1.0	5.0	1.0	6.8
保護者の育児への自信	無し	16.7	18.2	9.1	9.1	0.0	0.0	27.3*
	有り	8.1	10.9	7.1	2.1	5.2	1.0	5.1
言語表現発達	リスク	33.3	0.0	33.3	0.0	33.3	33.3*	33.3
	非リスク	8.3	11.9	6.5	2.9	3.8	0.0	6.5

注 ** p < 0.01 * p < 0.05

表3 学童期の心身の健康に対する学年調整後のオッズ比

	いらいらする		疲れやすい		不機嫌で 怒りっぽい		あまり頑張れない		誰かに怒りを ぶつけたい		勉強が手に つかない	
	オッズ比	95%信頼区間	オッズ比	95%信頼区間	オッズ比	95%信頼区間	オッズ比	95%信頼区間	オッズ比	95%信頼区間	オッズ比	95%信頼区間
学年 (05現在)	0.93	0.32- 2.75	2.46*	1.05- 5.73	0.57	0.12- 2.59	0.56	0.07- 4.80	0.98	0.27- 3.53	4.21	0.65- 27.27
歌と一緒に歌う機会	12.20*	1.50-99.46			15.69*	1.84-133.48						
同世代の子どもを訪問する機会			4.83*	1.15-20.38								
育児支援者			5.65**	1.55-20.65								
育児相談者							44.05**	3.24-598.45				
配偶者の子育て協力											33.54*	1.89-596.55
保護者の育児への自信									7.03*	1.40-35.43		
切片		-2.4120		-5.0071		-2.0444		-3.8321		-2.9092		-7.1936
H-L 検定		0.3293		0.6907		0.6064		0.1158		0.2452		0.5666

注 ** p < 0.01 * p < 0.05

「気持ちが沈んでいる」に幼児期の「子どもと買い物に行く機会に乏しい」、学童期の「疲れやすい」に幼児期の「同世代の子どもを訪問する機会に乏しい」が有意に関連していた。

さらに、学童期の「疲れやすい」「あまり頑張れない」に幼児期の「育児支援者がいない」、学童期の「あまり頑張れない」に幼児期の「育児相談者がいない」、学童期の「誰かに怒りをぶつけたい」に幼児期の「保護者の育児への自信がない」が有意に関連していた。

一方、学童期の「気持ちが沈んでいる」は、幼児期の言語表現発達のゆっくり群に有意に多

くなっていた。

(3) 学童期の心身の健康への複合的な影響要因 (表3)

学年を調整変数としたステップワイズ法による多重ロジスティック回帰分析の結果では、幼児期に「家庭で歌を歌う機会等に乏しい」場合、機会のある場合に比較して、学童期に「いらいらする」12.20倍、「不機嫌で怒りっぽい」15.69倍多くなっていた。幼児期に「同世代の子どもを訪問する機会に乏しい」場合、機会がある場合に比較して、学童期に「疲れやすい」

4.83倍、幼児期に「育児支援者がいない」場合、いる場合と比較して、学童期に「疲れやすい」が5.65倍、幼児期に「育児相談者がいない」場合、いる場合と比較して、学童期に「あまり頑張れない」が44.05倍、幼児期に「配偶者の子育て協力が得られない」場合に、得られる場合と比較して、学童期に「勉強が手につかない」が33.54倍、幼児期に「保護者の育児への自信がない」場合に、ある場合と比較して、学童期に「誰かに怒りをぶつけない」が7.03倍、多くなっていた。なお、各々のモデルは有意であった。

考 察

幼児期から学童期におよぶ子育て環境の子どもの心身の健康への影響に関する全国規模の追跡研究は、日本ではきわめて乏しい。米国においては、国立小児保健・人間発達研究所(NICHHD)による10年間の子育て環境の影響評価研究が報告され、質の高いかわり子どもが発達や問題行動の出現に影響することが報告されている。本研究は、その米国調査との比較検討が可能なデザインを用い、妥当性を検証した発達評価法を用いている点で、国際的にも影響度の高い研究成果となりうるものである。

本研究の結果、学童期の「いらいらする」「疲れやすい」「不機嫌で怒りっぽい」「あまり頑張れない」「頭痛がする」「気持ちが沈んでいる」「誰かに怒りをぶつけない」「勉強が手につかない」などの状態に、「家庭で歌を歌う機会が少ない」「同世代の子どもを訪問する機会がない」「育児サポートが乏しい」「配偶者の子育て協力が得られない」「保護者の育児への自信がない」など、幼児期の家庭でのかわりや育児サポートの乏しさが関連することが明らかにされた。

したがって本研究結果から、特に子育て支援として、保護者が家庭での子どもとのかわりの質を高めると同時に、育児相談や保育サポートなどの重要性が示唆された。

本研究では、学年を調整して多重ロジス

ティック回帰分析を採用した。これは既存研究においても、年齢の影響が報告されているためである⁶⁾⁻⁷⁾。

米国のNICHHD研究においては、子どもの心身の健康に幼児期の家庭環境の一貫した影響が報告されている⁶⁾⁻¹⁰⁾。これらは保育環境の要因を統制しても影響の強さは変わらず、保護者の子どもに対する豊かで適切なかかわりが、子どもの健康に好ましい影響を与えることを明らかにしている。スウェーデン¹¹⁾、ノルウェー¹²⁾のコホート研究においても、同様の結果が得られている。

カナダの20年に及ぶコホート研究では¹³⁾⁻¹⁵⁾、幼児期のさまざまな経験が、学童期の子どものパーソナリティに影響を与えることを明らかにしている。また英国の研究においては⁴⁾、幼児期の豊かな環境の生涯発達への影響について明らかにし、政策提言を行っている。

日本では、地縁の崩壊や女性の雇用形態の変化などにもとない、子育て支援ニーズは急増している。学童期に及ぶ子どもの心身の健康を確実に保障し、保護者が安心して子育てできる環境を作り上げることは、子どもと保護者両者のクオリティ・オブ・ライフの向上を実現し、少子化時代の施策推進の要となる¹⁶⁾。

一方、子育て支援専門職にとって、実証的な根拠に基づく子どもの心身の健康の増進を意図した子育て環境の整備は、極めて緊急度の高い課題である。本研究は、保育園在園時と卒園後の両時期の調査が可能であった19の限られた保育園における131名という少人数の調査結果であるという限界はあるものの、子育て支援の質の保証、質の向上に向け、本研究結果の活用が大いに期待される。

謝辞

調査にご協力いただいた全国夜間保育園連盟天久薫会長をはじめ連盟の皆様、保護者の皆様に深謝いたします。

本研究は厚生労働省子ども家庭総合研究の補助を受けて実施したものである。

文 献

- 1) 安梅勅江, 田中裕, 酒井初恵他. 子どもの発達への子育て環境の影響に関する5年間追跡研究. 子ども環境学研究 2005; 1(1): 1-6.
- 2) Anme T, Segal U. Center-based evening child care: Implications for young children's development. *Early Childhood Education Journal* 2003; 30(3): 137-43.
- 3) Burchinal MR, Campbell FA, Bryant DM, Warsik BH, Ramey CT. Early Intervention and Mediating Process in Cognitive Performance of Children of Low-Income African American Families. *Child Development* 1997; 68(5): 935-54.
- 4) Sylva K, Sammons P, Melhuish E, Siraj-Blatchford I, Taggart B. An Introduction to the Effective Provision of Pre-School Education Project. Institute of Education, University of London. 1999; 1-28.
- 5) 安梅勅江. 子育て環境と子育て支援 - よい長時間保育の見わけかた -. 東京: 勁草書房, 2004; 1-144.
- 6) NICHD Early Child Care Research Network. Does amount of time in child care predict socioemotional adjustment during the transition to kindergarten. *Child Development* 2003; 74: 976-1005.
- 7) NICHD Early Child Care Research Network. Child outcomes when child care center classes meet recommended standards for quality. *American Journal of Public Health* 1999; 89: 1072-7.
- 8) NICHD Early Child Care Research Network. Nonmaternal care and family factors in early development: An overview of the NICHD study of early child care. *Journal of Applied Developmental Psychology* 2001; 22(5): 457-92.
- 9) NICHD Early Child Care Research Network. Direct and indirect effects of child-care quality on young children's development. *Psychological Science* 2002; 13(3): 199-206.
- 10) NICHD Early Child Care Research Network. Relations between family predictors and child outcomes: Are they weaker for children in child care? *Developmental Psychology* 1998; 34(5): 1119-28.
- 11) Anderson B. Effects of day care on cognitive and socio-emotional competence of thirteen-year-old Swedish schoolchildren. *Child Development* 1992; 63: 20-36.
- 12) Borge A, Melhuish E. A longitudinal study of childhood behavior problems, maternal employment, and day care in rural Norwegian community. *International Journal of Behavioral Development* 1995; 18: 23-42.
- 13) National Longitudinal Survey of Children and Youth (NLSCY). National Longitudinal Survey of Children and Youth: Home environment, income and child behavior. <http://www.statcan.ca/Daily/English/050221/d050221b.htm>
- 14) Baydar N, Brooks-Gunn. Effects of maternal employment and child care arrangements on preschoolers' cognitive and behavioral outcomes: Evidence from the children of the National Longitudinal Survey of Youth. *Developmental Psychology* 1991; 27: 932-45.
- 15) Belsky J, Eggebeen D. Early and extensive maternal employment and young children's socioemotional development: Children of the National Longitudinal Survey of Youth. *Journal of Marriage and Family* 1991; 53: 1083-110.
- 16) Anme T, Segal U. Implications for the development of children placed in 11+ hours of center-based care. *Child: care, health and development* 2004; 30(4): 345-52.